

## 金田康正君、逝く

2020年2月17日

去る、2月11日、旧友であり、義従兄でもある金田康正君が急性虚血性心疾患で急逝した。冥福を祈ります。

1969年、東大シャットダウンの年に、東北大理学部に入学生には、おかしなやつらがいっぱいいた。同期には、のちに国際地理学連合(IGU)理事長になる氷見山幸夫や、梶田隆章先生のノーベル賞研究の協力者となる本田守広などがいる。大学紛争の中で、学問とは何か、社会との繋がりとはといった議論を、喧々諤々とやっていたが、この3名は議論を始めると止まらなかった。その中でも金田君は特別、頑固だった。独特の視点の自説を持っていて、それを曲げない。それでいて、相手の良い点は素直に認める優しさがあった。

物理学科の卒業時には、あの激動の時代を背景に、物理とは異なる分野に進む者も多かった。私は地球物理学専攻へ、上記の氷見山は地理学研究を目指して、ロンドンのキングス・カレッジに進学した。その中で、金田は、東大大学院理学系研究科の計算科学分野に進学すると言って、我々を驚かせた。当時、カシオの電卓がようやく出てきたばかりで、計算科学ってなに？という時代だった。しかし、先見の明があったと思う。実際、私自身、博士論文研究の際には、東大大型計算機センターに導入されていた国立大学最大の大型計算機 HITAC を使わなくては計算が終わらない時代が変わっていた。

大学院での金田君は後藤英一先生に師事して、リスト処理言語のLISPを専門にして、数式処理言語のコンパイラを作ってしまうほど優秀だったようだ。その後、それらの研究資産を基に膨大なプログラムを作成して、円周率の世界記録を打ち立てることになる。当時、この計算は単なる数学の問題だけではなく、大型計算機の管理ソフトとハードウェアの問題を洗い出して信頼性を高めるために非常に役立つとよく言っていた。この、道具としての大型計算機を使い倒すという発想は、その後、私が所属することになる東大気候システム研究センターが、スーパーコンピュータを導入する折にもアドバイスしてもらっている。気候センターが開発していたMIROC気候モデルを使った地球温暖化現象のシミュレーションのためには、スーパーコンピュータが1台、必要であったが、東大大型計算機センターのリソースをレンタルし、プロの運用支援を受けるという利用形態を採用して、膨大な最先端計算を実現することができた。

その後、行われた政府の事業仕分けにおける、計算速度世界一を目指す次世代スーパーコンピュータの研究開発事業に対する金田君の有識者としての意見は、このような、計算機は役にたたなければダメだという考え方に根付いていたと思う。蓮舫議員の「2番ではダメなのですか」と言う発言には、このような背景があったのだろう。

こんな頑固な金田君が、また、さっさと新しい世界に出発してしまった。きっと遠くを見るようなあの澄んだ目で、誰も気がつかない面白そうな研究の世界を発見したのだろう。健闘を祈る。

